

第 1 展示室

刀・千代金丸

これは今帰仁城の歴史で重要な役割を果たした「千代金丸（golden sword of a thousand generations）」と呼ばれる剣のレプリカです。日本国宝であるこの剣のオリジナルは、那覇市歴史博物館に収蔵されています。剣の刃紋から、この剣は 14 世紀に日本で鍛造されたことが伺えます。金箔張りの装刀具を含む柄と鞘は、おそらく琉球の職人によって作られました。剣の見た目は日本で使用されていたものとよく似ているものの、両手で持つよう作られている日本刀とは異なり、この剣は片手で使うつくりになっています。公式の琉球の史料によると、この剣は今帰仁城を本拠地としていた沖縄北部の北山王国最後の国王・攀安知（はんあんち）の持ち物でした。

1416 年、今帰仁城は南方の中山王国の軍勢の攻撃を受けました。伝説によると、中山軍が城に侵入した際、攀安知は自身が裏切られ、敗北が避けられないことを知りました。神が彼を守ってくれなかったことに激怒した攀安知は、城の祠の神聖な石を千代金丸で一撃して砕きました。その後、彼は自害するため剣を自分に向けましたが、剣は腹に刺さりませんでした。そこで、彼は剣を城壁からはるか下の志慶真川に投げ込み、代わりに短剣で自害しました。千代金丸は志慶真川の下流に流されて発見されて中山王である尚巴志のもとに届けられるまで、毎晩そこで光り続けました。この剣は後に彼が創設した第一尚氏という王朝の伝家の宝刀となりました。

剣の柄には菊の紋章と大世（たいせい）という銘が刻まれています。史学者たちは、この銘は大成王としても知られた琉球国王尚泰久（1415-1460）を指しているとしています。この剣は、1609 年の敗北後に琉球の国庫が略奪された際、九州の薩摩に持ち去られたと考えられています。1996 年、琉球王国最後の国王のひ孫である尚裕が、この剣を那覇市に寄贈しました。2006 年、千代金丸は国宝に指定されました。

1909 年に専門家による剣の詳細な調査が行われ、現在分かっていることの多くはこの時の報告書に基づいています。このレプリカは 2014 年に作成されました。

Katsuren Castle Ruins

勝連城跡